

# 岐阜の地芝居の足跡

— 『岐阜日日新聞』 明治前半期記事の渉獵から —

Newspaper articles of *Ji-shibai* (Kabuki performed by local people)  
in Gifu prefecture in the early Meiji era

土 谷 桃 子

## 要旨：

地芝居（地歌舞伎とも）は、その地域の人々が自ら演じて楽しむ歌舞伎である。岐阜県は、現在でも全国的に見て地芝居が盛んな地で、2015年からはそれを外国人誘客にも活かそうと試みている。このような現在に通じる岐阜の地芝居文化にどのような背景があるのかを、明治20年代までの『岐阜日日新聞』に掲載された記事を手がかりに考察した。まず、明治20年代までの同紙から地芝居関係の記事を抽出したところ、344点に上った。次に、それらを地域別、座名別に整理した。その結果、地芝居が盛んとされる東濃のみならず、岐阜市域にも芝居を楽しむ若者達がいたことが分かった。その例として、当時岐阜伊奈波の地に存在した国豊座・末広座における地芝居興行にまつわる事柄を紹介した。また、地芝居に対して否定的な見解を示す記事の多さが顕著であることも指摘した。例えば、地芝居は児童に悪影響を与える、災害後に芝居をするとは何事だ等の記事である。なぜこのような記事が多く書かれたのか、実例を紹介しつつその背景を考察した。最後に、地芝居という素材は、研究のみならず教育面でも魅力的であるという私見を述べた。

## はじめに

筆者は以前、岐阜市の伊奈波神社近くに存在した末広座・国豊座という芝居小屋について論考をまとめた（「岐阜の伊奈波の芝居小屋—末広座と国豊座—」『岐阜大学留学生センター紀要2014』2015.7、「岐阜の伊奈波の芝居小屋(2)—末広座と国豊座— 濃尾地震後の再築・再興—」『岐阜大学留学生センター紀要2015』2016.7）。その調査の過程で多く利用したのが『岐阜日日新聞』（現在の『岐阜新聞』の前身）であったが、そこに村芝居・地狂言・素人芝居等<sup>1)</sup>の記事が極めて頻繁に現れることに、純粋な驚きと興味を感じた。いずれはこの件についても考えたいと、記事を抽出し続けている。本稿では、その一部を活用して、岐阜市域での地芝居の実例、紙上に現れた地芝居に対する評価について述べる。

1) 本職の役者ではない土地の人々が演じる芝居については、地歌舞伎・地芝居・村芝居・農村芝居等の名称が使われるが（例えば、後述する岐阜県の場合は地歌舞伎（Ji-Kabuki）を使用）、本稿では、先行研究に倣い「地芝居」を用いる。引用文献中の素人芝居等の語もおおよそ同義である。

## 1. 岐阜県における地芝居の現状と先行研究

筆者の調査報告の前に、現在の岐阜県における地芝居の熱気と勢いを帯びた状況を紹介する。岐阜県は、平成27年度（2015）より「地歌舞伎と芝居小屋」を活用した外国人誘客事業を開始している（平成27年9月10日（木）岐阜県発表資料「「地歌舞伎と芝居小屋」を活用した外国人誘客事業がスタートします！」、観光企画課担当<sup>2)</sup>。これは、21年度（2009）に「岐阜の宝もの<sup>3)</sup>」として認定された「東濃地方の地歌舞伎と芝居小屋（恵那市・中津川市・瑞浪市）」を、観光の目玉のひとつにしようという試みである。30年度（2018）現在も、同取組みは継続されている。毎年各地域で行われ続けている定期公演に地域外からの観客を呼び込む試み、外国人観光客が滞在する高山や恵那のホテルや人気の観光地馬籠等での出張公演、英語での観劇指南を組み込んだプログラム開発、日英両語のパンフレット作成、毎年複数の地歌舞伎保存団体がぎふ清流文化プラザ（岐阜市）で公演を行う「地歌舞伎推進プログラム」の実施と「東京2020参画プログラム<sup>4)</sup>」認定など、約3年という短い期間ではあるが、さまざまな取組みが展開されている。詳細は岐阜地歌舞伎ツーリズム事務局ホームページ（<https://www.jikabuki.net/>）を参照されたい。

もともと岐阜県は地芝居が盛んな地で、現在全国で約200ある地域の歌舞伎保存会のうち、30団体が岐阜県である<sup>5)</sup>。県内には、明治期以前創建の芝居小屋が8つ現存している<sup>6)</sup>。それらは存続の危機に見舞われることがありながらも、地域の人々の尽力によって守られてきている。

---

2) 同発表資料の本文は以下の通りである。「県では、本年度からの新たな取組みとして、「岐阜の宝もの」である「地歌舞伎と芝居小屋」を活用した県内への観光誘客促進を目的に、地歌舞伎定期公演への受入や、特別公演・出張公演の実施など、年々増加する外国人観光客をメインターゲットとして、県内各地で順次展開していきますので、お知らせします。」注1で言及したが、岐阜県は「地歌舞伎」を名称として用いている。

3) 「岐阜の宝もの」とは、岐阜県が認定した、全国に通用する、ふるさとの誇りとなる地域資源である。平成30年度（2018）当初現在、全6点が認定されている（[http://www.pref.gifu.lg.jp/sangyo/kanko/kanko-shinko/sl1334/g\\_takara.html](http://www.pref.gifu.lg.jp/sangyo/kanko/kanko-shinko/sl1334/g_takara.html)、20180403確認）。

4) 同プログラムは、(公財)東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会が推進する文化プログラムで、2020東京オリンピック・パラリンピックを盛り上げるのにふさわしい全国各地のイベントが認定されている。

5) 安田文吉・安田徳子『ひだ・みの地芝居の魅力』（岐阜新聞社、2009）、p.10。なお、平成29年度（2017）刊パンフレット「岐阜の地歌舞伎」（<https://www.jikabuki.net/pamphlet/>、20180403確認）に掲載されている岐阜県内の団体は、以下の26団体である。

明智町歌舞伎保存会、東座歌舞伎保存会、飯地五毛座歌舞伎保存会、揖斐祭り子供歌舞伎保存会、恵那歌舞伎保存会、加子母歌舞伎保存会、可児歌舞伎同好会、岐阜歌舞伎保存会、申原歌舞伎保存会、気良歌舞伎保存会、坂下歌舞伎保存会、佐見歌舞伎公演実行委員会、高雄歌舞伎保存会、垂井曳軸保存会、東濃歌舞伎中津川保存会、常盤座歌舞伎保存会、白雲座歌舞伎保存会、東白川村歌舞伎保存会、東野歌舞伎保存会、飛騨市河合町歌舞伎保存会、蛭川歌舞伎保存会、鳳凰座歌舞伎保存会、三郷歌舞伎保存会、美濃歌舞伎保存会、村国座子供歌舞伎保存会、山岡歌舞伎保存会

他に、安岐歌舞伎保存会、乙原歌舞伎保存会、上矢作歌舞伎保存会、白虎台組子供歌舞伎保存会がある（『ひだ・みの地芝居の魅力』、『岐阜県の地歌舞伎ガイドブック』（岐阜女子大学地域文化研究所、2009））。

6) 岐阜地歌舞伎ツーリズム事務局発行のパンフレット「日本一！岐阜の地歌舞伎」（2017.3）による（岐阜県地歌舞伎保存振興協議会監修）。同パンフレットには、昭和26年（1951）築の五毛座（恵那市）を含む9つの小屋が掲載されている。

鳳凰座（下呂市）移築再建：文政10年（1827）（明治16年（1883）に観客席増築）  
 村国座（各務原市）創建：明治10年（1877）頃  
 東座（加茂郡白川町）創建：明治22年（1889）  
 白雲座（下呂市）創建：明治23年（1890）  
 常盤座（中津川市）創建：明治24年（1891）  
 かしも明治座（中津川市）創建：明治27年（1894）  
 相生座（瑞浪市）創建：明治28年（1895）、移築再建：昭和51年（1976）  
 蛭子座（中津川市）創建：明治34年（1901）、移築再建：昭和24年（1949）

現存芝居小屋の創建が明治20年代に相次いでいることが分かる。筆者が『岐阜日日新聞』の地芝居の記事の多さに目を見張ったのもこの時期である。当時の岐阜では、地芝居がどれほどの熱さで演じられ、観られていたのか。今はただ情報の断片として筆者の前にある記事の数々は、並べ替え、分析することによって、何かを示してくれるかもしれない。

全国的に見ても盛んな岐阜の地芝居については、頼りになる先行研究がある。その一端を紹介する。全体を見渡すには『岐阜県の地芝居ガイドブック』（岐阜女子大学地域文化研究所、2009）<sup>7)</sup>が適しており、村国座改修に際して連載された新聞記事をまとめた『ひだ・みの地芝居の魅力』（安田文吉・安田徳子、岐阜新聞社、2009）も詳しい。大判の『みのの地歌舞伎』（小栗克介・近藤誠宏、岐阜新聞社、1999）は、写真も充実しており視覚資料としても有用である。最近では、衣裳に焦点を当てた『ぎふ地歌舞伎衣裳』（小栗幸江、岐阜新聞社、2015）がある。また、県内の市町村史でも、地芝居・農村歌舞伎・地狂言等の項目が立てられていることも珍しくない。それらの記述も大いに参考になる。

観光という視点からの出版物も近年出ている。『大人の学び旅2 地歌舞伎を見に行こう』（産業編集センター、2017）には、長野県大鹿村、香川県小豆島とともに岐阜県美濃の「東濃歌舞伎」が紹介されている。新幹線車内やJR駅構内で販売されている雑誌『ひととき』2016年9月号では、「美濃・飛騨 歌舞伎遊山 日本一、芝居に熱い！」という特集が生まれ、作家の松井今朝子が文章を綴っている。このように、研究対象としてのみならず、現代人も魅了する観光資源としても、力強い魅力をたたえているのが地芝居なのである。

## 2. 記事渉獵

本稿で資料として用いた『岐阜日日新聞』は、明治14年（1881）2月19日創刊の地方紙で、現在の『岐阜新聞』の前身に当たる<sup>8)</sup>。岐阜県図書館蔵マイクロフィルム資料および岐阜市立図書館データベースでの閲覧が可能である。筆者は、岐阜県図書館マイクロフィルムを所蔵初号から

7) 本書の内容は、同研究所のインターネットサイトでも閲覧可能である（<http://www.gijodai.jp/chibunken/chishibai/>、20180403確認）。

8) 『国史大辞典』（ジャパンナレッジ）による。『岐阜日日新聞』にはさらに前身がある（明治12年（1879）11月3日創刊『岐阜新聞』）。他にも『岐阜新聞』を名乗ったものがいくつか存在する（明治6年創刊、同7年1月4日創刊、同8年3月8日創刊）が、それらは別紙である。

明治29年（1896）まで確認し芝居関係記事を抽出、その後同様に岐阜市立図書館データベースで欠号部分を補った<sup>9)</sup>。記事は、地芝居に限らず、江戸や上方からの大物役者の来岐、名古屋での興行の様子など、芝居に関連するものを広く拾った。

抽出した芝居関係記事のうち、地芝居に関連して地域が判明するものは、344点であった（ひとつの記事中で複数地域の地芝居に言及がある場合は、それぞれを1点に数えた）。まず、このデータの地域的に概観する。また、現存する小屋以外にも、座名を与えられていたものが散見されるため、それらも列挙してみる。

### 3. 記事データ整理

#### ○ 地域

収集データ344点の地域別の整理を試みた。地域の記載は、村レベルまで記述してあるもの、郡レベルまでしか記述されていないもの、さらに大雑把に「東濃」のような地方レベルのみ示したのものがある。まず、詳細な地域が記載され現住所と対応させられた283点を表1に示す（現在の市・郡まで判明したものは、詳細地域不明として表に含めた）。記載は地名五十音順である。

【表1：現市町村名判明分】283点

No.	現市・郡	記載点数	詳細地名
1	安八郡	2	神戸町1、輪之内村1
2	揖斐郡	2	池田町1、大野町1
3	恵那市	12	明智町2、岩村町2、笠置町1、串原2、三郷町1、山岡町2、長島町1、中野方町1
4	大垣市	6	青墓町1、赤坂町1、荒川町1、上石津町1、墨俣町1、不明1
5	海津市	4	平田町3、南濃町1
6	各務原市	20	上中屋町1、鷺沼1、各務4、川島1、下中屋町1、須衛3、蘇原4、那加3、成清町1、三井町1
7	可児郡	11	御嶽町2、同上之郷4、同中5
8	可児市	11	今渡2、大森3、塩1、二野1、羽野1、久々利2、谷迫間1
9	加茂郡	23	川辺町3、坂祝町1、白川町3、富加町1、東白川村10、八百津町5
10	岐阜市	52	茜部2、芥見9、伊奈波18、大洞1、雄総1、加納1、蔵前3、小西郷1、白木町1、長良3、野一色1、美殿町3、日野1、美江寺町1、柳ヶ瀬5、不明1
11	郡上市	14	八幡町7、美並町2、大和町1、和良町4
12	下呂市	21	小坂町1、金山町15、宮地3、焼石2
13	関市	8	上之保2、肥田瀬2、戸田1、武芸川町2、吉田町1

9) 明治29年までの岐阜県図書館蔵マイクロフィルムの欠号は、明治14年、15年7月11日まで、16～18年、19年5月以降、20年1月24日まで、同3～5月、21年5～10月。

これらの欠号のうち、岐阜市立図書館デジタルデータで補完できたのは、明治15年2月21日、同4月29、30日、同5月2～4、13、21、25、26、31日、16年4～6月、17年4月23日、同12月24日、18年4月8、16、18日、同6月11、14日、19年5～12月、20年1月5～23日、同3月15日～5月、21年5～6月、同8月17日。

14	高山市	11	一之宮町 1、上宝町 1、丹生川町 7、久々野町 1、不明 1
15	多治見市	4	喜多町 1、不明 3
16	土岐市	12	泉町 3、曾木町 1、駄知町 2、土岐津町 3、飛驒町 2、不明 1
17	中津川市	25	阿木 1、加子母 3、駒場 1、坂下 4、下野 1、田瀬 1、付知町 7、手賀野 1、苗木 2、茄子川 1、蛭川 1、福岡町 1、不明 1
18	羽栗郡	12	笠松町 12
19	羽島市	2	竹鼻町 2
20	飛驒市	2	神岡町 2
21	瑞浪市	15	明世町 4、稲津町 4、釜戸町・大湫町 1、河戸町 1、土岐町 1、日吉町 1、唐栗 1、巢南町 1、宮田 1
22	美濃加茂市	2	山之上町 2
23	美濃市	8	大矢田 1、神洞 1、藍見 2、極楽寺 1、上有知 1、中有知 2
24	本巣郡	2	糸貫町 2
25	山県市	1	高富 1
26	養老郡	1	養老町 1

上記283点のほかに、郡名や「東濃」のような地域名のみ示されたものが61点ある。郡名は、現在と当時とで区割りが異なり、現在の同名の郡や市が当時の郡の範囲と一致しない場合がある。表2の郡名は当時のものである。

【表2：郡名・地域名のみ記載分】 61点

No.	郡・地域	記載点数	No.	郡・地域	記載点数
1	厚見郡	2	9	羽栗郡	1
2	恵那郡	9	10	益田郡	2
3	大野郡	1	11	武儀郡	6
4	各務郡	1	12	本巣郡	1
5	可児郡	5	13	吉城郡	2
6	加茂郡	4	14	飛驒高山	5
7	郡上郡	7	15	西濃	2
8	土岐郡	4	16	東濃	9

○ 座名

『岐阜日日新聞』明治29年（1896）までの地芝居関連記事に現れる芝居小屋の座名を列挙する。記載は座名五十音順である。

【表3：座名一覧】

No.	座名	場所（現住所）	出現回数	掲載年月日
1	愛盛座	大垣市	1	M21.6.27
2	旭座	岐阜市芥見	1	M29.4.30
3	朝日座	関市吉田町	1	M29.8.26
4	東座	下呂市金山町	1	M28.10.6
5	泡雪座	岐阜市柳ヶ瀬	1	M25.5.6
6	泉座	岐阜市美殿町	3	M26.5.6, 26, M29.5.29
7	榎本座・榎元座	多治見市	3	M24.12.23, M26.4.18, M28.3.28
8	国豊座	岐阜市伊奈波	10	M19.6.9, 6.23, M20.2.17, 26, M22.10.12, 26, 11.3, 22, 28, 30
9	寿座	岐阜市柳ヶ瀬	1	M26.6.15
10	末広座	岐阜市伊奈波	8	M26.4.18, 26, 5.6, 6, 18, 6.15, 29, M28.1.23
11	高山座	高山市	1	M28.12.23
12	達磨座	羽島郡笠松町	1	M27.5.5
13	天狗座	羽島郡笠松町	1	M26.4.18
14	富本座	美濃市上有知	1	M26.12.24
15	豊国座	中津川市苗木	2	M28.9.17, 11.22
16	八幡座	瑞浪市明世町	1	M29.8.30
17	花菱座	岐阜市長良	1	M24.3.3
18	萬梅亭	中津川市付知町	3	M27.5.1, 18, M28.3.3
19	湊座・港座	羽島郡笠松町	3	M26.12.20, M27.1.6, 2.17
20	南座、北座	高山市	1	M22.3.17
21	明治座	中津川市加子母	1	M27.2.12
22	森元座	中津川市付知町	1	M29.1.8
23	豊盛座	下呂市金山町	1	M27.5.1
24	若宮座	恵那市中野方町	1	M20.12.14

4. 岐阜市の地芝居

岐阜の東濃地方が地芝居の盛んな地であることは、よく知られている。前出の「岐阜の宝もの」でも「東濃地方の地歌舞伎と芝居小屋」のように地域が限定されており、中津川市は「地歌舞伎のまち中津川」を観光のキャッチコピーにしている。芝居は東濃という認識は明治期にも明らかで、新聞記事にもたびたび現れている。引用はいずれも『岐阜日日新聞』からである（旧字は新字に改める。空欄挿入、下線は筆者。振り仮名は適宜削除。以下の引用にても同様）。

【記事1】 ●村芝居流行す 東濃の名物村芝居は 土岐郡の如きも甚しき流行をなし 適

ばれ有為の青年輩も 皆此の熱にうかされて 那処の青年会員某は 縁の下とこの九太夫が上手だつた 否な此処の高等四年生浮太郎は のべ鏡のお軽とこに当りを取つたなぞと言はるゝを此上なき名誉となし居るよし (M24.10.3)

【記事2】●村芝居の稽古 師直は素顔で似合ふ村芝居、土岐郡肥田村浅野区及び泉村大富区にては 若い衆連が例の素人芝居を興行せんとて 稼業は打捨て 三度の食事さへ殆んど打忘れて 高い日当の振付を雇ひ ギツクリ、バツタリ稽古の最中だといふ 蓋し素人芝居は東濃地方の風土病なり 是非に及ばずとは或人の評 (M28.9.20)

上記の記事では、東濃の芝居は「名物」「風土病」と称され、日当を払ってでも振付師に指導を受けている【記事2】。このように、東濃の芝居への情熱は疑いないものであるが、実は明治期には西濃にもその熱が波及していた。新聞記事で確認できたところでは、明治15年(1882)からである。

【記事3】●東濃地方にて年々村演劇しほびの流行することは 人の知る所なるが 今年西濃地方には何処とこの村も演劇を興行するよし (M15.11.28)

【記事4】●東濃の演劇しほび 西濃の煙火はなびは人の知る所なるに反して 今年西濃にて演劇流行の事は 度々紙上に掲載せしが 今日とこの景況にては 曾井中島を始めとして至る所 先代萩や二十四孝を興行せざるなく 皆々は狂気の如く奔走する由 又聞く所に因れば 戸長殿や豪農が勸進元や場方となり居らるゝといふは 妙な世の中 (M15.12.5)

上記記事に加えて、表1, 2でも岐阜市や各務原市の地芝居記事がかなりあることが目を引く。もちろん、記事の多寡がそのまま芝居熱の高さを示しているわけではない。社屋が岐阜市にあった岐阜日日新聞社が、情報を集めやすい近隣地域の記事を多く掲載したことは容易に想像できる。また、同一の興行が複数回にわたって記事になっている場合もあり、記事の多寡が興行数と一致するわけでもない。しかし、それを踏まえてなお、東濃に限らず明治期の岐阜は、地芝居に熱かったことを指摘しておきたい。

各務原市では、村国座が現存していることから、地芝居が盛んだったことがうなずかれよう。しかし、表3に各務原市の該当が見られないのは不審である。岐阜市は表1で記事52点を数えるが、中でも伊奈波の18点が目を引く。これは、表3の8.国豊座、10.末広座に該当する。両座については、過去に論考を著したことを「はじめに」で言及したが、その論考では本業の役者による来岐興行を中心にしていた。今回は、両座における素人の芝居を巡る状況を紹介したい。

### ○ 国豊座

明治22年(1889)10月、国豊座で素人芝居をしようと、若者達が集まった。「数年前に興行したる連中」【記事5】である。

【記事5】●素人芝居 当市末広町 桜町松屋町及び中教院前の若者連数名が共同して

素人芝居（数年前に興行したる連中）を 伊奈波国豊座 に於て興行せんと 昨今頻りに奔走相談最中なりといふ（M22.10.12）

反対意見もあったものの、「伊奈波辺の某数名」【記事6】の尽力もあって実現の方向に事態は好転する。この「某数名」とは地域の有力者であろうか。

【記事6】●素人芝居 <sup>かつ</sup> <sup>いつぞや</sup> 曾て日外の本誌に掲載したる 当市遊芸好きの若者連十数名が 今度伊奈波国豊座に於て芝居をなさんとするに 再三苦情が起りて中止の姿なりし処 伊奈波辺の某数名の尽力にて事纏まり 愈々興行することに決定し 兩三日前より桜町善燈寺に於て稽古に取掛りしが 今其戯題を聞くに 前狂言として伽羅先代萩 大序より大切迄 切狂言としては 伊勢音頭恋の油屋を 上中下演ずると 尚ほ大入は来月上旬なりと聞きぬ（M22.10.26）

実際の大入（初日）は11月22日であった。昼夜稽古し木戸銭を取ったとなると【記事7】、もはや「素人」と言っているのであろうか。

【記事7】●素人芝居 予て本誌に掲載したる当市好劇連の若者十数名が 先頃より昼夜稽古中なる素人芝居は 愈々今二十二日正午十二時より 伊奈波国豊座に於て興行する由にて 戯題は先日掲載したる如く 前狂言は 伽羅先代萩大序より大詰まで 切狂言は 伊勢音頭恋の寝釵上下にて 木戸銭は壹銭五厘の二枚札なりしといふ（M22.11.22）

この素人芝居興行は大成功だったらしく、11月27日には演目が加わり【記事8】、実現の可否不明ながらも、他地域への遠征までささやかれた【記事9】。

【記事8】●戯題差加へ 当市伊奈波国豊座に於て興行中なる岐陽連若者の素人芝居は 昨日より一ノ谷三段目（熊谷陣屋の段）と累土橋の二幕を差加へたり（M22.11.28）

【記事9】●素人芝居 当時当市の伊奈波国豊座に於て興行中なる当市の素人芝居は 昨日を限り打揚たるが <sup>それ</sup> 夫より名古屋大垣等に行き一興行せんととの計画あるが 名古屋では定めて大当り否……と道路にての評判（M22.11.30）

この興行の経緯を追うと、素人の芝居好きが単なる余興で楽しむという域に留まらず、地域を巻き込み、金銭も絡むかなりの大事になっていることが分かる。

## ○ 末広座

末広座は、明治19年（1886）11月、火事で焼失した。再築・再興は順調ではなく、26年（1893）4月に、ようやく規模を縮小して再スタートした。小屋が小さくなったためか、再興以降は大物役者の興行よりも、素人芝居が増えている。同年5月、6月の末広座の記事からは、素人芝居に熱中する若者の勢い余った様子が見て取れる。まず5月には、芝居小屋での食べ物屋台の出店を

巡るトラブルがあった。引用が長文に及ぶため、注目点に下線を施した。

【記事10】●小屋元と鰻屋の八分 岐阜市末広町末広座にて 此頃中素人芝居を興行し居れるが 其の開場当日より 町内若者の承諾を経て 加和屋町の或る鮓屋が末広座の前へ屋台を出せしに 其れが為め中店の売高に影響を及ぼしければ 小屋元の古道具半助は去る二日 右屋台店の退去を促したり 乃で末広町の若者連は 忽ちメリーと掃溜の淵に生へた落ほどの青筋を額に現はし 大に小屋元の不当を鳴らして 以後は一同末広座の木戸を潜らぬ事に決し 且つ今度の芝居に忠六の弥五郎だの 太十の重次郎だのといふ役を取つてゐる同町鰻屋吉茂事 生月茂七の長男正吉 今度此のたびの芸名尾上正幸に対し 今日限り舞台へ出るなど掛合つた故 町内若い衆の剣幕には敵し兼ねて 正幸の千両役者が其の日から芝居を断はつたので サア大変 小屋元は恠り仰天して 実に何うも今度の芝居は此方のお息子様一人で持つてゐます 其れに今更抜けて貰つてといふものは 薩張り芝居が出来ません 正幸さんは何うも感心に芸が巧いから 実に素敵な人気でげす 其の座頭さんに見放された日には 必死溜りません 楽屋中は申すに及ばず 数ならぬ私しまで 如何ばかりか大慶 オット愁嘆至極に存じ上げ奉ります 其の為め口上左様など、出放題におだて上げた処から 鰻屋先生は煙に捲かれ 子を褒められた嬉しさに 町内の若者へはダンマリにて俸れを再出勤させ 鉄砲創には似たれどもとか 二つには又初菊どのとか踊らせて 親の口から鰻屋ア吉茂の姫殺しと申しますぜい 喃漢と遣りも仕兼ねぬ塩梅ゆゑ 若者連は再び激昂し 直ちに生月茂七 町内八分の決議をぞ為したりける 之に依つて 吉茂方は其の後頓と鰻が売れぬので 殆んど閉口して居るに引替え 先頃長良から引越て来た鰻専門の大浜屋は お客を一手に引受けて蛭子顔だといふ 尤も昨今町内の中老達が仲裁に立入り 精々若い衆の気焰を吹消して居るさうだから 何れ仲直りが出来るでせう (M26.5.6)

芝居小屋の前に勝手に屋台を出した若者達のほうが悪いように思うのだが、自分達が許可した屋台を退去させられた若者達は激怒する。その怒り方が、今後末広座の芝居は見ないことにする、末広座で興行中の主役（鰻屋生月茂七の長男正吉、芸名尾上正幸）の出勤を止めるという方向に向かう。主役が出勤しないと困る小屋元が、主役の父親の鰻屋に泣きついてどうにか彼を舞台に戻ってこさせたが、そのことで若者達がさらに怒り、今度はその鰻屋を八分にして鰻購入をボイコットし、商売を立ち行かなくさせるという顛末である。若者達の傍若無人な振る舞いには呆れるが、この記事が興味深いのは、素人芝居と言いつつも、鰻屋の長男が自称ではあろうが芸名を持ち、客を呼べる人気役者として認知されていることである。「千両役者」は言い過ぎだろうが、彼が出ないことに小屋元が「恠り仰天」するような役者ではあったわけである。ただの余興レベルではないことが、この一連の出来事からも分かる。

6月には、小屋の利用を巡っていざこざが起きる。最初美殿町の泉座（明治25年（1892）10月開場）で興行をすることになっていた若者達【記事11】が、使用料が高額になったことなどに不満を持ち、末広座に場所を変える騒ぎになった【記事12】。泉座、末広座とも、当時開場もしくは再開して日の浅い新しい劇場である。

【記事11】●又ぞろ素人芝居 一雨毎に岐阜市には素人芝居が生えたと見えたり 今度は

些と見られるだろうとの前人気にて 出勤の役者はんは金津廓<sup>10)</sup>の若い衆連（妓夫は勿論仲間に入れず）蓋明けは来月六日頃の積り 場所は美殿町の泉座と定まり目下同廓栄枝町芸妓屋桔梗屋米八方の二階に於て ソラ左の足を出して ナニ着物を捲つて毛脛を出すのぢや無い 其の足を斯う踏出すのぢや（後略）（M26.5.28）

【記事12】 ●金津の若者大ひに憤る 別項金津廓素人芝居の若者は 最初美殿町の泉座に於て興行せんと同座に頼みしに 同座にては 持ても立てぬ高ひ小屋代を云ひ張るのみならず 其外にアレが入用 之れに入費と云ひ立てたので 若者等は大ひに憤り 人を馬鹿にするのも大体があると腕をまくり 遂に末広座で興行したる次第なるが 若者等は 此の分ではすまされない 此れから先き泉座で興行のある度毎に 押出して妨害をなし 一番困らせて呉れると云ひ居る由（M26.6.15）

先にあげた国豊座の素人芝居の記事から4年後のこの頃、雨後の筍のように岐阜市で素人芝居が盛んになったとある【記事11】。金津廓が出現し、町全体がより賑わいを増していたことだろう。料金を釣り上げる泉座はかなり強気だが、泉座でのその後の興行を見ると、素人による興行よりも本業の役者一座によるものが多い。元々地芝居に小屋を貸す気があまりなく、難癖をつけて若者達を追い出したのだろう。一方、規模を縮小して再興した末広座は、地芝居興行が多い。岐阜市の繁華の中心は、明治24年（1891）の濃尾地震後に伊奈波地区から柳ヶ瀬地区に南下するが、本件もその現れのひとつだと考えられる。

国豊座も末広座も現存しないが、明治20年代には元気いっぱい若者達が、いささか問題を起こしながらも両座で芝居に興じていたことを、本節では実例をもって示した。

## 5. 新聞記事に見られる地芝居への評価

表1, 2に示したように、多くの地芝居関連の新聞記事が『岐阜日日新聞』に見られるが、地芝居への情熱、地芝居に熱中する人々の姿を浮かび上がらせると同時に、それらへの批判も相当数見受けられる。地芝居は風紀を乱すものとして、何度も規制されていたからである。

維新後間もない明治5年（1872）、俳優鑑札制度が開始される。鑑札を持たなければ、本職の歌舞伎役者でも舞台に立つことができなくなった。これが素人役者にも適用された。『中津川市史下巻Ⅱ』（中津川市、2006）によると<sup>11)</sup>、明治7年（1874）に岐阜県令小崎利準は芝居の興行地を県内18箇所限定し、翌年には俳優等に税金を課し、素人の興行でも「遊芸鑑札」が必要と定める。それでも相変わらずの状況だったためか、15年（1882）には学童の演劇について禁止の諭達が出される。こうした背景もあって、地芝居に対して批判的な記事が多く書かれていたのである。実例をいくつか示そう。

【記事13】 ●学齡児童の狂言 東濃の名物と云へば 誰しも素人狂言に指を屈するなるべ

10) 金津廓は、明治21年（1888）11月に現柳ヶ瀬に開かれた遊郭である。

11) pp.1578~1579

し 此の狂言も大半は秋冷の時候と共に熱度が減じたる有様なるか 過日の事とか恵那郡の或る村落にて 素人狂言の催しありたるか 其の過半数は学齡兒童にてありしとは 聞くも忌はしき話なり 欧米文明の新空気を呼吸する今日に方り 尚ほ是等の野蠻者流を見るあらんとは 吁々東濃教育の度合は 定めて如何ぞや……高乎……低乎……我々は此の一斑を以て 其の全豹を評さんと欲す 非邪 (M22.10.16)

【記事14】●村芝居、会員に伝染す 東濃地方の愚物どもが 彼の沙汰の限りなる芝居の狂熱に侵さるゝ事は 今更珍らしくも無きが 無教育の蛙切り 豊年を祝ふは唯だ是あるのみと思ひ居る農民輩なら未だしもなれど 土岐郡土岐津町辺にては 学術研究とか智識交換とか 口には立派な事を唱へ居る 然も何々会員と肩書のある青年輩までが 此の村芝居熱に侵さるゝ如き腐敗物あるには 実に嘆息に堪ずとなり (M24.9.8)

【記事15】●馬鹿い衆の素人芝居 羽栗郡嶋村の若い衆は 素人芝居を目論見既に廿日程前より ソレとん〜〜 クルツト廻つてカラシ杯と不器用に稽古中なるが 来る十八日は旧暦十月三十日の神迎ひに相当するより 同日花々しく大入をなさんものと 子を甘やかす親達までが大幟り押立て一世一代の馬鹿さわぎ 昨今竹ヶ鼻町へ呉服等の買物にゾロ〜出掛けるよし (M25.12.14)

【記事16】●馬鹿の極点 東濃恵那郡阿木村の馬鹿い衆 昨今芝居の稽古に夢中なり 斯る下らぬ事に費す金を 水害地方へ義捐せば如何 (M26.9.26)

【記事13】のように児童への悪影響を心配するものが多い。「欧米文明の新空気」に対して、地芝居は「野蠻者流」なのである。にもかかわらず、児童のみならず、高い教育を受けているはずの青年達まで芝居熱に浮かされる【記事14】。芝居に熱中する若い衆を揶揄した「馬鹿い衆」【記事15】という語彙は、この後繰り返し紙面に出現する。彼等には「子を甘やかす親達」がおり、親子揃って馬鹿騒ぎをする。このような騒ぎが繰り返され、挙句に「馬鹿の極点」【記事16】とまで言われている。

【記事16】は水害であるが、自然災害と娯楽とのすり合わせは今も昔も難しい。明治24年(1891)10月28日の濃尾地震では甚大な被害が生じ、その直後はさすがに芝居を自粛していたようであるが、被害を免れた地域では、翌月には芝居をし始める輩がおり、それに対する批判も起きている【記事17,18】。

【記事17】●村芝居 時節柄少しは謹んで貰ひたしと云つた処が 同感同情の念なき奴輩の耳には入るまじく 所謂縁なき衆生は度しがたけれど 四千万の我同胞中 否百万の我が県民過半は劇烈なる地震に遭遇し 家財を蕩尽して飢寒を訴へ 父母を喪ふて余燼中に白骨を求め 妻子を傷つけて塵焔中手当の行届かざるを歎ずるものある今日に当り 幸い己れ震災を免れたればとて 馬鹿〜しき田舎芝居に狂奔するとは何事ぞ 聞く郡上郡土京村及び飛騨国益田郡竹原村大字乗政、同郡三郷村大字萩原、同郡下呂村大字小川及び森、同郡中原村大字保井戸及び門和佐に於ては 近々田舎芝居を興行せんとすと 是れ等の奴輩に向つて

幾回無情、浮薄、無感覺、無神経等の語を費すも要なき業なれば 只馬鹿の一語を以つて評し去らん 苟りにも之れを口惜しと思はゞ 暫しなりとも田舎芝居を止めよ (M24.11.12)

【記事18】●馬鹿者 郡上郡大原村福野組の馬鹿者 否若者は 県民の不幸を余所に見て村芝居を為し 去る十日大入三日間興行したるは 余りの仕方に就き 存分筆誅をとの投書ありたり (M24.12.16)

次の【記事19】は、「慈善演劇」という名目で辻褄を合わせた例である。若者達が密に準備をし警察署からの許可も得た芝居をいざ上演しようという時に、地震後という時節柄不謹慎・不都合だと町内から大反発が起こる。両者自説を譲らなかったが、芝居の収入の十分の一を義捐金にするという仲裁で話がまとまったという。

【記事19】●慈善演劇の顛末 本月十六日大入の筈にて多治見町榎元座に於て 例の東濃名物素人寄合芝居を興行せんと 隣村の土臭い若い衆が集合し 密に四五日間稽古し イザ明日より大入と云ふ十五日 相当の手續を以て警察署に出願せしに 同署にては 時節柄余り世間の聞へも悪しとて注意を加へられしも 種々言<sup>ことば</sup>を構へて 終には許可を得 町内へ其広告をなせしより 町民の激昂する処となり 不都合なり 隣村の馬鹿者めらが 屢々新聞屋に筆誅せられしにも懲りず 時も有るふに震災後日の浅き今日 素人芝居とは何事ぞ吾々が其筋に向て震災救助願 商業資金貸下願等に大に差支を来すのみならず 多治見町に於て此際右様の狂気<sup>きちがひ</sup>じみたることをなさしめては 多治見町の不面目なり 飽まで之を中止せざるべからずと 終に委員を選んで町役場 警察署等に出頭し 出願せし始末を取調べし 願人を役場に召還して説諭を願ふことにし 又一方よりは談判委員を芝居連に差向け談判に及びしに 少しも聴入れず 許可を受けた故飽くまで断行するとの意気込に 中止連は益々憤激し 町総代よりは 今回の芝居に一人も見物に行くべからず 若し行くものは料料金五拾銭を取ると云ふ嚴重なる触を廻したるより 断行論者も大に狼狽したるが 遂に同地の青年会員安藤清六氏が 慈善芝居として興行し 日々収入金の十分の一丈地方の震災被害者へ義捐することに中裁を試みしに 断行連は賛成し 義捐金は日々町役場に納むることまで承諾せしも 中止派 尚承諾するの模様もなかりしが 此頃終に不本意ながらも承諾したるより 近日中に見出の如き慈善演劇を興行する由 (M24.12.23)

これほどまでに批判され罵倒されながらも、なぜ岐阜の地芝居文化は継続したのか。実は、地芝居愛好家は、若者達だけではなかった。村長【記事20】や議員【記事21】にも芝居好きがいた。

【記事20】●驚きいつた村長 可児郡或村の村長某は 震災後部下人民困窮し村内到る処に歎声を聞かざるは無く 或は租税免除を請願し 或は小作人一同地主に逼り 彼と云ひ是と云ひ 実に村内多事の折柄なるに 役場へは更に出頭せず 毎日自宅にありて退屈の余りにや あらふ事かあるまひ事か 人民の歎声を耳にも掛けず 同村の俳優某を勧め 無頼の青年輩を呼び集め 役場員の諫止するも聞き入れず 自分の宅地内なる舞台に於て芝居興行を為さしめんと 目下頻りに其の下稽古を励まし居ると云ふが 此の時節柄をも弁へず 村

長たる身分にて斯る事を為して楽み居るとは 僣<sup>ま</sup>てへ驚き入つたことにこそ (M25.7.1)

【記事21】●俳優議員（村民辞職を勧告す） 可児郡上之郷村辺に村会議員兼学務委員を勤むる何野某氏は 過日來村内の馬鹿者を煽動し 素人芝居興行に専心奔走しつゝ、ありしが幸ひにして之に応ずるものありしかば 大に力を得て一層身を入れ 五六日前より其下稽古に着手し 自分は先づ座頭たらん事を希望し居ると云ふ 斯く迄芝居興行の順序が運びし事として 何野氏は喜びは手の舞ひ足の踊るを知らざるほどにしあれば 自分の負ひ居る職務は殆んど尽さるゝ如く 謂はゞ冷淡極るとも云ふべければ 同村民の重なる者は 此頃中 大に激昂し 斯の如き吏員あるに於ては一村の不利益も亦甚だしからんとの説を唱へ 不日辞職勧告を為す事に協議したりと云ふ話なり (M26.8.16)

本業を疎かにするほどの熱中ぶりは迷惑だが（恐らくは面白おかしく強調されているのであろうが）、「若い衆」や「農民輩」だけではなく、村長や議員にも芝居好きは珍しくなかったのではないだろうか。さらに言えば、批判している記者自身も、本心は別だったのかもしれない。建前では地芝居はけしからんと言いつつ、本音では老いも若きも、職業も隔てなく、芝居に心浮き立たせていたのが明治の岐阜の人々ではなかろうか。そうでなければ、たとえ批判ではあっても、これほどまでに紙面に繰り返し地芝居の記事が現れることもなかろうと思うのである。

## おわりに

本稿では、明治20年代までの『岐阜日日新聞』紙上の地芝居関連記事344点を用い、岐阜の地芝居が盛んであることや地芝居の実例、地芝居とそれに熱中する人々への視線について考察した。岐阜は芝居が盛んだという一般的な印象を、具体的に補強できたと自負している。もちろん新聞は万能な資料ではない。新聞社から離れた地における情報がどの程度掲載されたのかという発信側の制限、明治20年代の東濃や飛騨でどれほどの人が新聞を見ていたのかという受信側の事情、それらに留意する必要がある。しかし、新聞はその当時を確実に移す鏡であることも確かである。他の資料、例えば市町村史と見比べながら、慎重にかつ有効にこれらを活用していく所存である。

今後考えられる課題には、舞台上で演じた人々、演じられた演目、興行にたどり着くまでのシステムといったソフト面、芝居小屋・舞台などのハード面があるだろう。例えば、ソフト面の演者について言えば、芸名もある人気役者がおり<sup>12)</sup>、好評を博して他の地域への遠征を噂される興行もあった<sup>13)</sup>。木戸銭を取っていることもあり、現代の我々が考える「素人」という概念とは、微妙にずれるのではないかという感触を得ている。さらに感触程度のことを続ければ、ざっと見た限りでは、地芝居の演目はいわゆる定番の演目が多い。せつかく1年に1回もしくは数回だけしか演じられないなら、誰もが知っている格好のいい役をやりたいというのは、今も昔も変わらない人の常である。それに、同じ演目だと道具や衣裳も同じものが使えて都合がいいだろう。これは、現在の地芝居の現場でも同様である。また、解明が難しいとは思いますが、地芝居興行のシス

12) 【記事10】参照

13) 【記事9】参照

テムも興味深い。芝居好きが集まって仲間内で演じるだけなら簡単だが、鑑札を取る、芝居小屋を借りる、警察署の許可を得る、木戸銭を徴収する等のシステムは、地芝居が行われる各地でどう滞りなく行われていたのだろうか。各芝居小屋に残る資料にヒントがあるかもしれない。他地域の地芝居についての先行研究を探索する必要もある。

最後に、視点を変えての私見を述べたい。岐阜で学ぶ留学生に教育を施す立場でもある筆者は、研究対象として地芝居を見るだけでなく、教育の素材としても魅力的だと考えている。地芝居は、岐阜に来たからこそ体験できる文化のひとつであり、地域文化を学ぶ格好の素材である。また「はじめに」で述べたように、岐阜県は地歌舞伎（地芝居）を外国人誘客、いわゆるインバウンド観光につなげようとしている。この試みはまだ始まって約3年であり、可能性と不安定要素を併せ持っているが、留学生が地芝居を経験して感じたことをフィードバックすれば、外国人に地芝居を楽しんでもらうためのヒントともなる。研究と教育と地域貢献の3面の魅力を持ち、3面を掛け合わせることができるのが岐阜の地芝居である

明治初期には、児童に悪影響を与える悪習であり廃止すべきであると評された地芝居が、平成の現在、地域文化の伝承として小学生や中学生の参加が奨励され、外国人にも愛でられるものになるとは、明治の素人役者達が知ったら大いに驚き喜ぶことであろう。そのようなことを想像しながら、今後も彼等の姿と岐阜の地芝居を引き続き掘り起こしていきたい。

## 参考文献

- 小栗克介編、近藤誠宏写真『美濃の地歌舞伎』岐阜新聞社 1999  
小栗幸江企画・編、近藤誠宏撮影『ぎふ地歌舞伎衣裳』岐阜新聞社 2015  
土谷桃子「岐阜の伊奈波の芝居小屋—末広座と国豊座—」『岐阜大学留学生センター紀要2014』、2015.7  
同「岐阜の伊奈波の芝居小屋(2)—末広座と国豊座 濃尾地震後の再築・再興—」『岐阜大学留学生センター紀要2015』、2016.7  
同『岐阜地域芝居興行記録一覧稿（明治初年～）』JSPS 科研費25370213助成調査成果、2016.3  
松井今朝子「美濃・飛騨 歌舞伎遊山 日本一、芝居に熱い！」『ひととき』2016年9月号  
守屋毅『村芝居 近世文化史の裾野から』平凡社 1988  
安田文吉・安田徳子『ひだ・みの地芝居の魅力』岐阜新聞社 2009  
  
『大人の学び旅2 地歌舞伎を見に行こう』産業編集センター 2017  
『岐阜県の地芝居ガイドブック』岐阜女子大学地域文化研究所 2009  
岐阜女子大学地域文化研究所サイト <http://www.gijodai.jp/chibunken/chishibai> (20180403確認)

- 『糸貫町史』糸貫町 1982  
『恵那市史 通史編 第3巻(1)下 近現代』恵那市1993  
『大垣市史』大垣市役所 1930  
『各務原市史 考古・民俗編 民俗』各務原市 1985  
『可児市史 第3巻 通史編 近・現代』可児市 2010

- 『申原村誌』 申原村役場 1968  
『坂祝町史 通史編』 坂祝町 2005  
『新修東白川村誌 通史編』 岐阜県加茂郡東白川村 1982  
『中津川市史 下巻Ⅱ』 中津川市 2006  
『飛騨下呂 通史 民俗』 下呂町 1990  
『瑞浪市の歴史』 瑞浪市 1971  
『瑞浪市史 歴史編』 瑞浪市 1974  
『御嵩町史 通史編 上』 御嵩町 1992

